

スピーチ能力の向上をめざす指導
原稿作成からメモ書きへと補助の度合いを下げるプロセス

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇

1 はじめに

国際化の進展が著しい今日において、情報や考えなどを英語で伝える能力の育成は重要な意味をもつと考えられている。しかし、現実には多くの日本人が外国人とのコミュニケーションにおいて、そうすることに困難を感じている。英語教育には、「実践的コミュニケーション能力」の育成が求められている。その中でも話す力は、生徒が特に伸ばしたいと考えているものでもある。現在まで、授業指導の中でこの能力を育成するための実践を試みてきたが、なかなか効果的な指導方法が見出せなかった。

2 主題設定の理由

本研究では、話すことの領域に焦点を絞り、主題を「スピーチ能力の向上をめざす指導」とした。話すことの指導は、文法や語彙、表現などを習得するための表面的な活動にとどまり、それらを運用する活動まで行われていない場合が多い。紋切り型の応答や、一往復程度の言葉のやりとりだけで終わってしまうといった問題点も存在する。その結果、生徒の英語運用能力を向上させることは難しい。自分が読み取ったことの概要や自分の考えなどを、自らの言葉で相手に伝えることができる力をつける必要がある。その実現のために、始めは原稿を用意し、それに依存しながら話す時期を与え、やがて補助の度合いを下げ、自分の伝えたい内容についてメモ書き程度の準備だけで話すことができるようになることを目標とした。それが可能になれば、積極的に情報や考えなどを英語で話す能力と態度を育成することができるであろうと考えた。

3 研究計画

(1) 1年目(平成18年6月～平成19年3月)

対象生徒	普通科・ コース1年 1クラス 名
科 目	「オーラル・コミュニケーション」
教 科 書	Hello there! Oral Communication (東京書籍)
研究内容	話す内容をフル・スクリプトで書いて準備する指導 上記 に基づいて口頭発表する指導

対象生徒	普通科・ コース2年 1クラス 名
科 目	「オーラル・コミュニケーション」
教 科 書	empathy oral communication (教育出版)
研究内容	話す内容をフル・スクリプトで書いた後に、その要点をまとめたメモを作成する指導 上記 に基づいて口頭発表する指導

(2) 2 年目 (平成 19 年 4 月 ~ 平成 20 年 3 月)

対象生徒	普通科 1 年 3 クラス 122 名	
科 目	「英語」	
教科書	Powwow ENGLISH COURSE (文英堂)	
研究内容	第 1 段階 (4 月から 9 月)	第 2 段階 (10 月から 12 月)
	原稿を作成して発表	キーワードを記したメモだけを見ながら発表
	研究課題を達成するための補助的手段 教科書の本文を要約することができるようになる指導 身近な話題について発表することができるようになる指導	

4 研究実践

(1) 1 年目の実施

ア 原稿作成及び発表指導

< 1 年生 「オーラル・コミュニケーション」の授業において >

時 期	活 動 内 容
5 月	自己紹介文の作成と発表
9 月	3 人のグループでクッキングレシピの説明
11 月	自分の住む 市に関する紹介
3 月	“Schools should offer girl students a choice between uniforms with pants and those with skirts.”のテーマについて意見発表

英語で話すことは、生徒にとって大きな壁である。その理由として、話す内容が頭の中で整理できないこと、それに加えて、自分の英語に自信がないということが多くの生徒の声であった。そこで、事前に原稿を作成し、それに基づいて発表するという過程を繰り返すことから始めた。

(ア) 指導上の留意点

- ・ 原稿を作成したうえで話す活動を繰り返すことにより、自信を持たせる。
- ・ 話す内容に論理性を高めるために、〔 Introduction 〕 〔 Body 〕 〔 Conclusion 〕 の構成を意識させる。
- ・ 間違えた英語をそのままにせず、教師が添削によるフィードバックを与える。
- ・ 自分の間違いに気づかせるため、フィードバックを受けた原稿を書き直させる。

(イ) 指導結果

英語表現

顕著な間違いとしては、3 人称単数現在形の -s の付け忘れ、時制など動詞に関連したものが大半を占めた。また、名詞の数とそれに伴う冠詞の使用にも多くの間違いが見られた。この改善のため、原稿用紙の最後に、

動詞の形は合っていますか？	名詞の数は合っていますか？
---------------	---------------

というチェック欄を設けた。これを利用して提出前の見直しを促したことにより、語法上の誤りは減少した。

論理性

〔Introduction〕で主題を明示する，〔Body〕では，First, Second, Finally といった語を使用する，〔Conclusion〕では主題を別の表現で繰り返す，という指導を行った結果，ほとんどの生徒に定着した。

発表技術

作成した原稿をスピーキングへとつなげていくという観点から，発表時は原稿を見てもよいが，可能な限り顔をあげることを意識させ，自然な発話を心掛けさせた。当初はどうしても原稿に頼り，読んでしまうことが多かったが，徐々に改善が見られた。

<ハンドアウト例>

Topic "Schools should offer girl students a choice between uniforms with pants and those with skirts."		
Your opinion I (agree / don't agree) , because _____		
In your group		
Name	Agree or Disagree	Reasons
In my group,		
.....		
Please write your own opinion.		
.....		
.....		
.....		
動詞の形は合っていますか？ 名詞の数は合っていますか？		

イ メモ書き作成

< 2 年生 「オーラル・コミュニケーション」の授業において >

時 期	活 動 内 容
5 月	学校の特徴を紹介
6 月	“High school students should wear school uniforms.”のテーマについて意見発表，話し合い
10 月	3 人のグループで日本の地域紹介
2 月	“English should be taught as a subject from primary school.”のテーマについて議論

1 年次に (1) アのような自己表現活動を経験してきている 2 年生は，原稿作成における英文の量も増え，英語の質も上がってきている。しかし，原稿を手元において，それに依存しながら話している状態では，最終的に獲得することを目指す自己表現力へとつながらない。そこで，フル・スクリプトの形で書いた原稿からキーワードのみを抜き出し，そのメモを見ながら話すことを目標とした。キーワードは，その表現を用いなければ話の内容が相手に伝わらない可能性が非常に高い内容語を中心とした。

(ア) 指導上の留意点

- ・ 完成した原稿からキーワードを選択し，手のひらサイズの小紙片へ転記させる。

- ・相手に自分のメッセージを伝える行為であるということを意識させるため、発表の際には“Read and Look Up”を徹底させる。

(イ) 指導結果

原稿作成においては、言いたいことが全く通じないというような英語は見られなくなった。スペリング、文法の軽微なミス、単語の選択の仕方の間違いなどは、添削指導によって解消するように努めた。作成した原稿からキーワードを抜き出し、それをもとに発表することが目的であるが、初期には語(句)を抜き出し過ぎる傾向があったため、最小限度にとどめるように指導した。抜き出した語から連想が可能な語は抜き出さない、その語がなくても内容が伝わる形容詞などは抜き出さないように指導した。この結果、抜き出す語(句)数は減少した。メモを見ながらの発表はなかなかスムーズにいかず、生徒は「話す」というより、「暗記したものを再生する」だけになってしまう傾向が見られた。円滑なスピーキングへの移行という、本来の目的を見失わないように指導する必要があると感じた。

< 生徒原稿例 >

「日本の地域紹介」における生徒の原稿

I'm going to introduce the food in Shikoku to you. There are many delicious Mikan, or small oranges in Shikoku. Also, in Kagawa city, there are many delicious Japanese noodles. They are famous in Japan and also foreign countries. Lastly, Kochi city has very famous foods such as Katsuo, or bonitos. Mainly we eat it with rice. Please try it one day. Thank you for listening.

原稿をもとに作成したメモ書き

*food in Shikoku
many delicious Mikan
Kagawa, noodles.
famous
Kochi, bonitos
eat it with rice
try it*

ウ 意見発表

生徒のスピーキング面における実践練習になり、その力の推移を観察するのに適当であると考えたため、意見発表活動を取り入れた。

(ア) 指導の概要

【準備内容】

- 生徒の興味・関心を考慮した適切な論題を用意する。
- 4人組のグループを作る。
- グループ単位で Affirmative side / Negative side を指定する。
- グループ内で相談し、論点が重ならないように個々のスピーチを作成させる。
- 予想される相手の反論を事前に考えさせ、それに対する反駁を用意しておく。

【実施手順】

- グループ対抗(4人対4人)で、Affirmative side / Negative side 交互に意見発表を行う。ここでは、事前に用意したスピーチを行う。なお、正式なディベートにおいては、Affirmative side から始まり、Affirmative side で終わるのが通例だが、この指導においては、便宜上次のような形で実施した。

Affirmative side	Negative side
1. First affirmative speech	2. First negative speech
3. Second affirmative speech	4. Second negative speech
5. Third affirmative speech	6. Third negative speech
7. Fourth affirmative speech	8. Fourth negative speech
9. Free discussion	

b. 相手のスピーチをよく聞き，反論を考えておく。

c. 最後に Free discussion を設け，双方から自由に討議を行う。

(イ) 指導結果

年度の初めにスピーキングテストを実施して英語運用力を 3 つのレベルに分け，そのレベルごとに発話語数の変化を観察した。レベル分けの基準は以下の通りである。

英語運用力 A：全体の上位 30%内の生徒

英語運用力 B：全体の中位 40%内の生徒

英語運用力 C：全体の下位 30%内の生徒

< 2 月実施 “English should be taught as a subject from primary school.”の話題を扱った際の例>

英語運用力 C の生徒のスピーチ原稿

指導前

We can learn many nice voice, because our child's ear is very nice. If children remember mistake sound, when child can soon change nice sounds. So we can learn difficult nice sounds.

主語の設定，従属節と主節のつながりについて訂正を促すとともに，日本語を直訳せず，英語の論理構造を意識するように指示した。教員も手助けをしながら，原稿を再度書かせ，下のように訂正した。

指導後

Children can learn many nice sounds because they have good ears. If children remember mistaken sounds, they can remember to change them easier at an early age, than adults can.

英語運用力 A の生徒のスピーチ原稿

We don't think English should be taught as a subject from primary school. We think it doesn't make sense at all. Do you know what they are doing at English classes in primary schools? They just learn "Hello", "How are you?", or they are doing really easy games. So even if they don't have those classes, it doesn't matter. They can learn only a few things, for example "Hello", "Hi" or "Bye" and so on. Maybe some students already know them. If they don't do that, they can learn those in junior high schools. Now in Japan, if they have English classes from primary schools, it's going to be wasting time.

英語運用力 B の生徒のスピーチ原稿

We don't think English should be taught as a subject from primary school because we think it has a influence on Japanese. When they are primary school students, they learn and remember a lot of Japanese. Japanese language and culture is more important than English because it is our heritage.

生徒は概ね、原稿作成から発表まで意欲的に取り組んだ。あるテーマについて自分たちの主張を伝え合うという活動が、実践的で新鮮に感じたようだ。発話量も他の活動に比べて増加した。生徒の感想にも、「相手より良い主張をしようと自分たちの意見を発表するので、原稿作成や発表が楽しかった」など、好意的な内容が多かった。

(ウ) Free discussion について

この活動の最後に、相手の主張に対して自由に討議を行う Free discussion を設けた。これは、相手への反論をその場で即座に考えて発表し、反論された側は更にその反論を考えるとというものである。事前に予想される相手の反論及びそれに対する反駁を考えてあるので、ごく簡単なメモだけで、自分の考えを発表することになる。

6 月実施の際には空白のまま時間が過ぎたが、2 月実施においては、積極的に相手の主張に反駁する姿が見られた。反駁の訓練を特別にしてきたわけではないが、英語を論理的に話すことに慣れてきて、一定の成果が上がっていると考えられる。

英語運用力 A の生徒の反駁例

Second affirmative speaker said, if we start studying English from early age, we can communicate with foreign people, but we don't think so, because it's very difficult to communicate with someone, however he or she speak in Japanese. Now in Japan some concerned about people, not only children even if adults cannot talk with neighbor or friend enough, so this is the condition where Japan is. Learning English is good, but there is more important thing before learning English. We must learn Japanese. Primary school is not time to study English so we don't think they don't have to study English from primary school.

(2) 2 年目の実施

2 年目の研究では普通科の 1 年生が対象となり、前年と比較すると英語運用力が下がる生徒となった。そこで、研究課題を達成するために、2 つの補助的手段を講じた。第 1 は、教科書の本文を要約させることである。第 2 は、身近な話題について発表させることである。どちらの活動も、第 1 段階(4 月～9 月)では原稿を作成し、それを見ながら話す時期とし、第 2 段階(10 月から 12 月)は、メモを見て話す時期とした。

なお、年度当初に、“My Junior High School Days” というタイトルで原稿を書かせた上で面接方式のスピーキングテストを実施し、英語運用能力を A から C の 3 段階に分類した(分類の区分けは、5 ページに示した 1 年目と同様)。それをもとに、生徒の英語運用力の変容を追跡した。

ア 教科書本文の要約

教科書の各レッスンにおける１つのセクションが終了したところで、要約活動を行った。

(ア) 第１段階：原稿を作成して発表

教科書本文の中にキーワードが存在することを意識させ、それを指定し、要約文を原稿に書かせた。その後、口頭発表させた。

(例) Lesson 2 “The Maldives, the last paradise on earth” Part 2 の要約

指定キーワード - turtle, decreasing, coral, bleached (or dead), global warming

英語運用力 C の生徒の要約例

Turtles is decreasing. Because of global warming, coral reefs dead.

英語運用力 A の生徒の要約例

The writer saw a lot of beautiful fish and coral. A turtle was resting on the coral reef, and the number of turtles is decreasing. A lot of bleached coral. This was due to rising water temperature caused by global warming.

(下線部は、A lot of coral is bleached.と訂正させた。)

この時期(５月)に見られた特徴として、情報量が乏しく、英語の論理性に欠ける上、語法の間違いも多く見られた。このままでは相手に伝達する上で大きな支障をきたす恐れがあったため、要約の仕方や手順について、次の２点を目標として指導を継続した。

- ・内容について：各パラグラフのトピックを示し、流れを整理する。
- ・英語の質について：主語と動詞の関係をはっきりさせる。

その結果、10月の実施では、下記のように改善の傾向が見られた。

(例) Lesson 4 “A lucky man” Part 3 の要約

指定キーワード - P.D. meds, hide, my family and friends, tell everyone

英語運用力 B の生徒の要約例

I carried P.D. meds around with me. I carried them to hide my disease. Only my family and my closest friends knew about my disease. In 1998, I became a producer of Spin City. I became busier. My disease got worse. I decided to tell everyone about my disease.

文章は細切れになった感があるが、主語と述語の関係が整うようになった。内容の中心的話題と話の展開も整理されるようになった。

この活動を半年間継続した結果、研究の目的である「メモを見て自分の考えなどを話すこと」への第一歩となる、論理的に話すトレーニングになった。

(イ) 第２段階：メモ書きを見ながら発表

原稿を書く活動を経て、第２段階ではキーワードだけで、口頭要約することを求めた。これにより、キーワード以外の部分については、自分で英語をつなげて補うことになり、より実践的なスピーチ能力の向上につなげさせたいと考えた。

(例) Lesson 5 “Return to the wild, my Aqua” Part 1 の要約

指定キーワード - violin, shore, seal, curiosity, encounter

英語運用力Bの生徒の要約例

One sunny fall afternoon, Fiona was playing the violin on the shore of Islay Island. She became aware of the snuffling of a seal. The seal was young, bright-eyed, whiskered face showed his curiosity. This was her first encounter with seals.

これを作成した後で、キーワードだけを見ながら口頭要約をさせた。

Fiona play, was playing the violin, she, by the shore. She was aware of the seal. The seal was curiosity. It was first encounter.

言いよどみや繰り返しがある上、文章もキーワードを使った文しか再生されず、書いた要約文よりかなり短くなってしまった。しかし、キーワードだけを見ながら概要を話すことができるようになるという目標は達成され、一定の成果があったと評価できる。

イ 身近な話題について発表

アでの指導を生かし、自分のことについて表現する活動を同時進行で行うことで、スピーキング能力を向上させようと考えた。テーマは、生徒にとって話しやすいものがよいと考え、学校生活や身近な話題、さらには教科書のレッスンで扱った内容に関連したものとした。

〔扱ったテーマ〕

中学校生活の思い出、高校生活への期待、遠足の感想、趣味・特技、週末の過ごし方、部活動、夏休みの思い出、好きなテレビ番組、文化祭、体育祭、映画、環境問題など

（ア）第1段階：原稿を作成して発表

a. 指導の概要

- ・テーマを与え、それについて原稿を書かせる。
- ・ペアで発表させる。
- ・原稿を回収し、添削指導をする。次の授業時に返却して、第2稿を書かせる。

英語運用力Aの生徒の原稿例：“My Summer Vacation”

I went to Saga Inter High with Ichifuna basketball team. I stayed at there July 29th to August 1st. I went there by plane and bus. It takes about three hours. A result is best sixteen. I had a good time in Saga. （下線部は、それぞれ I stayed there from July 29th to August 1st. / It took と訂正

b. 指導結果

原稿作成については、アの要約指導と同様、様々な問題がみられた。添削指導を行うとともに、多くの生徒に共通する問題点は、毎回の事後指導時に全体に注意を促した。発話しようとする意欲は高かったが、回を重ねるとモチベーションが下がってくる。どのようにすれば飽きさせないかの工夫が必要である。

(イ) 第2段階：メモ書きを見ながら発表

a. 指導の概要

- ・テーマを与え、それについて自分が話すことのキーワードをメモさせる。
- ・ペアで発表させる。
- ・自分が話した英文を書かせ、回収する。
- ・添削指導をする。
- ・次回返却して、清書をさせる。

b. 指導上の留意点

アの要約活動では、先に原稿を書いて、そこからキーワードを抜き出させていたが、ここでは、キーワードのメモを作って発表し、事後に原稿を書かせた。

英語運用力Bの生徒のメモ例：“How I Spend My Weekend”

good weekend, volleyball, cleaned, tired, enjoyed, good time

上記のメモをもとに再生した英文

I had a very good weekend. I practiced volleyball and cleaned my room.
I got very tired, but I enjoyed it very much. I had a good time.

c. 指導結果

メモ書きだけを見ながら英語を話していくのは、生徒にとって難しい作業であったようだ。しかし、ゆっくりではあるが、英語をつなぎ合わせ、なんとか自分の事柄について伝えようとしていた。内容の面でも、8割以上の生徒が言いたいことを概ね伝えることができていた。

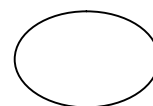
<授業で使用した原稿作成用ハンドアウト>

Today's topic: _____

Please write what you spoke to your partner today.

.....
.....
.....
.....

今日の speech で言いたかったけど言えなかったことは？



words

(ウ) 実施後の指導について

言おうとしたが適切な表現が思い浮かばなかったことなどを上記のハンドアウトに記入させ、個々にメモを書いて返却し助言をした。指摘したポイントについては、次回以降のスピーチに取り入れている姿が見られた。また、毎回の語数をその都度記録させ、5回を1セットとして、平均語数を算出させた。これは、生徒各自が自分の成長を知る目安とさせた。

(エ) 活動の考察

(ア)と(イ)の活動において、英語で自己表現することに意欲的に取り組んでおり、英語で話すのが楽しいと言う生徒の声を多く聞いた。この活動についてアンケートを実

施したところ、

- ・教科書の内容を扱うのとは違い、自分の言葉で自分のことを話せる。
- ・英語で話せる語彙が増えた。
- ・文の作り方がわかるようになってきた。
- ・英語で話せたという達成感がある。

などの感想があがった。このような気持ちを抱くことは生徒の自信と意欲につながり、スピーチ能力の向上に間接的に効果をあげていた。

5 評価

日ごろの授業では、生徒の活動の様子、ハンドアウトの記載内容及びスピーチ原稿を点検した。当初は話すことに苦手意識を持ち、ほとんど発話しなかった生徒たちが、様々な活動を積み重ねることによって少しずつ意欲を見せ始め、徐々に英語で話し始めた。生徒へのアンケート、発話語数の変化、活動の評価からそれらを検証した。

(1) 生徒へのアンケート

<対象：2年目の研究対象生徒（普通科1年生 名）>

ア 今年度4月に比べ、英語を話す力が向上したと感じますか。

そう思う 20.5% (25人) どちらかといえばそう思う 41.8% (51人)
どちらかといえばそう思わない 23.0% (28人) そう思わない 14.8% (18人)

イ 原稿を書くことは、話すことに役に立ちましたか。

そう思う 23.8% (29人) どちらかといえばそう思う 46.7% (57人)
どちらかといえばそう思わない 19.7% (24人) そう思わない 9.8% (12人)

ウ メモ書きを見て話すことができるようになりましたか。

そう思う 9.8% (12人) どちらかといえばそう思う 37.7% (46人)
どちらかといえばそう思わない 35.2% (43人) そう思わない 17.2% (21人)

アの質問では、60%を越す生徒が英語を話す力が年度当初より向上したと考えている。イの質問では、原稿を書くことが英語を話すことに役に立ったと認識している生徒が70%を越えている。伝えようとする事柄を事前に準備することにより、話しやすくなるという実感を持たせることができた。ウの質問からは、メモだけを利用して話すことは困難だと感じている生徒も多いことがわかる。この理由は、指導時間が短かったこともあるが、補助の度合いが下がると困難を感じる生徒が多いということだと考えられる。効果を感じている生徒も約半数いるので、指導を継続していきたい。

(2) 自己表現活動における語数の変化

<1年目の実施：メモ書き作成指導（2年生）「意見発表」活動における発話語数の推移（各レベル5人の生徒の平均、小数点第1位四捨五入）>

生徒英語 運用力	第1回スピーチ（6月） における発話語数	第2回スピーチ（2月）におけ る発話語数
A	53	86
B	39	57
C	26	38

< 2 年目の実施：「身近な話題について発表」する活動における発話語数の推移
(各レベル 5 人の生徒の平均，小数点第 1 位四捨五入)>

生徒英語 運用力	原稿を見て話す時期		メモを見て話す時期
	4 月	9 月	10 月
A	28	37	30
B	22	35	27
C	12	24	19

それぞれ，どのレベルの生徒も発話語数の伸びがみられた。発話語数が必ずしもスピーチ能力の向上を示すとは言えないが，一つの指標として，話す意欲が向上していることが表れていると考えられる。

(3) 非研究対象との比較

11 月に，2 年目実施の 1 年生普通科 1 クラスと，研究対象外の同学年同科クラスとスピーチ能力の比較を行った。扱っていた教材が動物関係のレッスンであったので，レッスン終了後に“My Favorite Animal”というテーマでスピーチを行った。前日に予告し，キーワードのメモ書きは見て良いこととし，面接方法で実施した。

< 研究対象クラス (41 名) と非研究対象クラス (41 名) の平均発話語数 >

クラス	発話語数平均
研究対象クラス	30
非研究対象クラス	22

この結果，半年間の原稿作成及びメモ書き作成の指導から，スピーチ能力が向上したといえる。発話の内容についても，非研究対象クラスと比較すると，研究対象クラスは論理性が感じられた。

(4) 活動の評価

ア 原稿を作成して発表

原稿をフル・スクリプトで書くことによって話す内容を確認でき，それをもとにスピーキング活動を円滑に進めることができた。原稿を作成する過程で主語と動詞の関係を考えるようになり，短文ながら整った英文を書くことができるようになった。また，名詞の数，動詞の形，時制などを間違えないように使おうとする習慣も身についた。結果として，アウトプットする英語の質が総合的に向上した。また，英語の論理性を意識し，〔Introduction〕〔Body〕〔Conclusion〕の構成で英文を作成できるようになった。さらに発表段階では，原稿に頼りながらも，顔をあげて発話しようと努力した。

イ メモ書きを作成して発表

この活動は，原稿を見て話す段階と，何も見ずに英語で話せる段階の橋渡しをするものであると考えていた。英語で話すことに集中力が必要なため，発話された英語に間違いはあるものの，自分の伝えたい主題を盛り込み，相手に伝えることができるようになった。その点において，スピーチ能力の向上に成果があった。

6 考察

我々が何かについて話そうとする際には、母語でもまず原稿を書き、次に大事な要点をメモ書きし、それを見ながら話すというプロセスをたどることが多い。これは外国語習得においても正しいプロセスであると信じ、研究を進めてきた。

効果があった点としては、原稿を書く作業を重ねるうちに、話そうとする事柄の全体像を頭の中で構築することができ、メモ書きによる発表段階へ移行しても、英語が口をついて出てくるようになったことである。これを継続していけば、やがて頭の中にメモ書きができて、何も見ずに英語で話すということにつながっていくのではないかと感じられた。この点から、原稿作成からメモ書きへと補助の度合いを段階的に下げるプロセスは効果があったと考えられる。

悩んだ点は、原稿作成の段階を設けると、どうしても伝えようとする内容と使用する英語の正確さとの両立を考えなければならないという点であった。発話を促すための研究であったので、正確さを求めすぎないことが必要であると考えていたが、いざ英文を見始めると、それを放置しておいてよいのかという疑念が浮かび、添削作業に追われた。生徒に発話を促す指導と英語の正確さを期す指導は、どちらも大切なことであり、兼ね合いが難しいことを感じた。

7 おわりに

スピーキング能力の向上は、我々英語教師にとっても、生徒にとっても大きな目標であると同時に、どこまで進んでもなかなか終着点にたどりつけない永遠のテーマであると思う。今回の2年間にわたる研究では、その長い過程のほんの一部の取り組みであった。しかし、その到達点が見えにくい課題と格闘した時間は決して無駄ではなかったと思う。やらなければ何も進歩しないが、真剣に取り組めば少しずつ前進することができる実感を持つことができた。生徒は、こちらが誠意を持って取り組むと、それに応えようとする姿勢を見せてくれ、研究を進める上で大きな励みになった。

この研究にあたり、千葉県教育庁教育振興部指導課 前指導主事（現千葉県立生浜高等学校教頭） 先生、同課 現指導主事 先生、前教科指導員（現総合教育センター指導主事） 先生、現教科指導員 先生、同 先生には懇切丁寧な御指導をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

8 参考文献

高等学校学習指導要領解説 外国語編 文部科学省 (1999)

松本茂 編著 「生徒を変えるコミュニケーション活動」(1999) 教育出版

高橋正夫 「実践的コミュニケーションの指導」(2001) 大修館書店

金谷 憲・谷口幸夫編 「スピーキングの指導」(1995) 研究社

中嶋洋一 「英語のディベート授業 30の技」(1997) 明治図書